京都大学 大学院教育学研究科／教育学部

46
2023.6

News Letter

Graduate School of Education

ソウル大学校との研究交流会

巻頭言 2
齊藤　智　研究科長

名誉教授から 3
杉本　均　名誉教授

褒章受章 3
藤原　勝紀　名誉教授

研究ノート 4
[教員から] 藤間　公太　教育社会学講座　准教授
[院生から] 河合　風　修士課程2回生
[社会人院生から] 福田　高之　修士課程1回生
[留学生から] 康　楠　博士後期課程3回生

活動報告 6
[附属臨床教育実践研究センターから]
松下　姫歌　附属臨床教育実践研究センター長
[教育実践コラボレーション・センターから]
西岡　加名恵　教育実践コラボレーション・センター長
[グローバル教育展開オフィスから]
高山　敬太　グローバル教育展開オフィス　教授

事務室から 7
國見　和敬　事務長補佐兼教務掛長

国際交流事業 8
高山　敬太　グローバル教育展開オフィス　教授

若手研究者出版助成事業 8

諸記録 10
・教員寄贈図書リスト　2022（令和4）年度
・主な出来事　（2022.11.1 ～ 2023.3.31）
・入試結果　2023（令和5）年度
・学位授与件数　2022（令和4）年度
・教育職員免許状取得状況　2022（令和4）年度
・外部資金受入れ（2022.10.1 ～ 2023.3.31）
・科学研究費補助金　2023（令和5）年度
・人事異動　（2022.11.1 ～ 2023.4.30）

諸報 15
・新任教員・事務職員紹介
・名誉教授訃報

教育学研究科・教育学部基金 16

京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの元客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製薬、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

巻頭言

学ぶAIから学ぶ

教育学研究科長・学部長　齊藤　智

「今回のNews Letterは、研究科の教員や学生たちが取り組んでいる最新の研究や取り組み、そして研究科の近況をお届けします。私たちの研究科では、教育に関する様々な分野の研究を行い、教育の理論や実践に貢献することを目的としています。そのためには、教員や学生たちが日々熱心に研究に取り組むことが欠かせません。今回のNews Letterでは、その中から一部の研究やプロジェクトをピックアップしてご紹介します。」

これは、ChatGPTが書いたNews Letter巻頭言の冒頭部分です。微かな既知感を惹起します。この後、続いて3つのプロジェクトが紹介されます。それらは、行われていそうな、しかし、厳密にいえば実在しないものでした。それでも、紹介された研究分野のバランスはよく、3つのプロジェクトは、全体として、教育学研究科の守備範囲をカバーしています。

さて、当研究科が冠する教育は、人間が変化するということを前提とした営みです。その変化は不可逆的(irreversible)です。人間に起こる変化が一方向的であり、逆行しないということは、生物学の原則であると言ってもよいでしょう。ただし、人工多能性幹細胞 (induced pluripotent stem cell: iPS細胞) という例外があることをご存知の方も多いかもしれません。一度分化した細胞は、未分化な状態に戻ることはありません(でした)。これを未分化な初期の状態に戻したものがiPS細胞なのです(iPS細胞について詳しく知りたい方は、京都大学CiRAのホームページ https://www.cira.kyoto-u.ac.jp/ をご覧ください)。それでも、今生きている人々の変化が不可逆的であることに変わりはありません。大人になってしまえば、もう子どもに戻ることはないのです。

私自身が、研究と授業を通じて学生の皆さんに伝えているのは、人間の心のありようが刻々と変化するということです。その変化は、生物学的な成熟や加齢に基づく側面と、社会の中での経験に基づく側面の相互作用によって不可逆的に進みます。しかもその変化は、ごく短時間でも起こっています。こうした一刻一刻の、一日一日の変化の積み重ねが、数年後、数十年後に顕在化する大きな変化をもたらします。

変化の不可逆性は、教育という営みにある種の緊張感を与え、この営みを根本から深く理解することを求めるのだと考えています。教育学研究科・教育学部の扱う広い意味での教育学という学問が必要とされる理由の1つはここにあります。ただし、不可逆性は、生物にのみ特徴的な変化の性質であるというわけではありません。興味深いことに、学習の上に学習を重ねていくAI (Artificial Intelligence) もまた、不可逆的に変化していきます。そのことを示す、よく知られている現象の1つが、破滅的忘却 (catastrophic forgetting) です。AIに何かを学習させた後に、別の学習を行わせると、先に学習されていた内容が劇的に忘却されてしまうという現象です。逆に、先に学習した内容が、次の学習に影響を与えることもあります。

冒頭で紹介したChatGPTによる巻頭言の続きを読むと、他大学の教育学研究科ではなく、京都大学の教育学研究科関連情報が参照されていると考えたくなります。もちろんホームページ等の内容がそのまま出力されているわけではありません。ChatGPTは、学習とその結果起こる変化に基づいてNews Letter巻頭言を生成したのだと推測されます。生成されたNews Letter巻頭言は、ChatGPTの学習履歴を反映していると言えるのかもしれません。

学習によって不可逆的に変化していくAIへの「教育」は、人間の教育を考える上でも興味深い知見をもたらしてくれるものと期待できそうです。また、その試みは、私たちが知性と呼んでいるものを理解するための手がかりを与えてくれるに違いありません。これは、前世紀の科学者が描いていた展望です。それが実現しなかったのは、当時の技術を超えた構造的複雑性がそこに求められるからでした。AIの飛躍的な発達が、リスクの査定と回避、倫理的な課題の克服を前提に、今、こうした教育学のアプローチを可能にしています。私たちは多くのことをAIから学ぶことができるでしょう。

ところで、ChatGPTは、巻頭言をどのように締め括ったのでしょうか。「最後に、私たちは今後も、より良い教育の実現に向けて、熱心に研究に取り組んでいきます。その成果を通じて、社会に貢献し、より良い未来のために貢献することを目指しています。」と述べています。この内容に満足しないのであれば、私たちの情報発信のあり方を再考してみることになるのかもしれません。AIの学習は、社会の中で利用可能な情報に基づいているのですから。

教育学研究科の「小宇宙」

杉本　均

元比較教育政策学コースに在籍していました杉本均です。私は1993年に助手として赴任してから、教育学部・教育学研究科にはおよそ30年間お世話になりました。教育学部はいうまでもなく学生数では京都大学で一番小さな学部です。このアットホームな雰囲気のなかで私の研究者人生の大部分を過ごすことができたことは大変幸せであったと思います。しかし、教育学部は学問的には決して小さくはありません。この学部には、哲学、歴史学、心理学、社会学など文学部にあるほぼすべての領域を教育においてカバーしているだけでなく、さらには経済学、法学、一部では工学、医学の領域も扱っています。すなわちわずか30人ほかのスタッフで、京都大学のほぼすべての学部・研究科の研究領域にかかわっています。少し誇張して言えば、最も小さな学部にもっとも大きな領域が含まれるというパラドックスを現出しており、私はこれを教育学研究科の「小宇宙」と呼んでいます。

この学際性はコースや講座を越えた共同研究で、化学反応を起こし、大きな火花を散らし、予想を超えた煌めきをもたらしてくれることがあります。これこそが教育学部・教育学研究科のかけがえのない財産と言えます。GCOEなどのように講座を越えたプロジェクトでは、司会をするだけでも、全く異なる方法論や言葉遣いに出会い、まとめようとするだけでも大変なプレッシャーに直面します。この苦痛のような刺激が結果的に個人の知的な発想の飛躍を触媒することになるのかも知れません。もし皆さんに言葉を残すとすれば、ぜひ、この苦痛や、違和感や、不納得をもたらす「小宇宙」の学際性を大事にして、自らその居心地の悪さに身をゆだねる勇気を持っていただきたいと思います。あえて「他流試合」を求めて、よその道場の門をたたいてみてはいかがでしょうか?

藤原 勝紀 名誉教授が瑞宝中綬章を受章（2023年 春）

藤原勝紀名誉教授は、1996年12月に九州大学健康科学センター教授より、京都大学教育学部教授に配置換になり、以降、同学部の大学院重点化に伴い、同大学大学院教育学研究科教授、教育学部教授兼担となられました。さらに2000年4月同大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター教授に配置換となり、その設立にあたっては心理臨床学の学問としての体系化により、多大な貢献を残されました。そして2003年12月から2005年3月まで、同大学院教育学研究科長・教育学部長を併任され、研究科ならびに学部の発展のみならず、京都大学における心理臨床学の教育・発展に重要な功績を残されました。

その後2004年には、藤原名著教授の貢献により、日本で初めて臨床心理士有資格者を研究・実践両面における指導者として教育するためのコース「臨床実践指導者養成コース」が設置され、当該コースの講座「臨床実践指導学講座」の教授となり、本年20周年を迎える講座(コース)の礎を築かれました。

本学退職後もさらに後進の指導や学会活動を通して、現在も臨床心理士ならびにその指導者養成に尽力されています。主著として、『三角形イメージ：イメージを大切にする心理臨床』(誠信書房)、『からだ体験モードで学ぶカウンセリング』(ナカニシヤ出版)をはじめ、編者として『臨床心理スーパーヴィジョン(現代のエスプリ別冊)』(至文堂)他、多数の学術論文を創生されています。

現在は、京都大学名誉教授・京都市教育相談総合センター常任顧問・(公益財団法人)日本臨床心理士資格認定協会専務理事・(一般社団法人)日本心理臨床学会理事長として、幅広く心理臨床学の学界を牽引し続けていらっしゃいます。

藤原勝紀名誉教授のご受章を心よりお祝い申し上げます。

教員から

ルーツとの再開

教育社会学講座
准教授
藤間 公太

今年度より教育学研究科でお世話になることとなりました。専門は家族社会学で、社会的養護、なかでも施設養護を対象とした質的調査を通じて「ケアの脱家族化」のあり方を考える、という研究をしております。施設養護においては、生活を共にしながら子どものケアが行われています。この点は「家族」と変わらないのですが、一般的に施設養護を「家族」とみなす人は多くありません。ここに、日本社会における「家族」をめぐる通念を解き明かすヒントがあるのではないかと考えています。

こうしたテーマに興味を持った背景は、中学生の頃にさかのぼります。当時はいわゆる重大少年犯罪が社会問題となっていました。それらの事件が報じられるとき、少年の成育歴、なかでも家族との関係が大きく取り上げられていました。当時は自身が反抗期真っ只中だったこともあり、「自分も家族と仲が悪いけど、人を殺そうとは思わない。自分とこの人たちと何が違うのだろう」とぼんやりと思っておりました。

当時抱えた疑問をそのまま大学の卒論のテーマにしました。重大少年犯罪についての新聞報道を分析対象とし、教育社会学における社会化についての議論と社会心理学における自己概念についての議論を援用して事件の背景を考える、という卒論でした。いまひとつ消化不良感がぬぐえなかったので大学院に進学し、修論も新聞報道記事の分析で執筆しました。そこでの結論は「家族を取りまく地域社会の硬直性が問題では？」というものでした。まだスッキリしなかったので博士課程に進学し、「家族」とみなされない場での子どものケアを見てみようと施設での調査を開始し、現在に至っております。

冒頭でも述べたように、現在は専門を家族社会学としています。ですがこうして振り返ると、自分の疑問を解消する最初の手がかりにしたのは教育社会学でした。卒論執筆から15年近くが経過したいま、教育社会学のセクションに着任することになったことには、不思議なご縁を感じています。

院生から

たゆたうこと

臨床教育学講座
修士課程2回生
河合　風

先日友人とご飯を食べた。彼の周りでは結婚する人も増え、自身もマッチングアプリを使ってお相手を探しているらしい。ジョッキを空けながら彼は、アプリ上で繰り広げられる定型文の会話が嫌だと私に漏らした。曰く、「休みの日は何をしていますか？」「趣味は何ですか？」といった一問一答を、マッチした何人もの人々と繰り返さなければならないという。だがこうしたやりとりが面倒臭いからと直接会ってみると、チャットの時と同じ一問一答型の滑らかなコミュニケーションに終始し、時折挟まる「わかるー！」の相槌で会話は終わってしまうらしい。なるほど、一問一答で表出された彼のごくわずかな特性の、一体何が「わかる」のだろうかと、彼の苦悩を思った。

彼の場合は「わかる」の暴力性にそれほど深刻さを感じていないらしい。けれども、育った文化や言語、立場が全く異なる相手とのコミュニケーションにおいてはどうなるだろう。「わかる」と言葉にした瞬間、相手を内面化する暴力性は一挙に振るわれる。このことは何も異文化理解という文脈だけでなく、SNS上で自分と異なる人々を目にする機会にも直面する事態である。滑らかなコミュニケーションに慣れすぎた日本語社会はきっとこの状況に弱い。そのことを表すかのように、ここ最近のSNSではわかりあうことを拒んだ対立が目に付く。わかることの安直さと、わかりあうことを手放した拒絶。肩をしょぼんと落としたくなるこの時代において、私はネガティヴ・ケイパビリティに光明を見出そうとしている。これは「不確定で曖昧な事態をそのままにできる能力」といった意味で、私は「たゆたう力」と言い換えてみている。わかることも、わからないと突き放すこともせず、不確定な状況をたゆたう力。性急に答えを出さず、なんとか耐えてみる力。教育現場や日本社会で大事にされてきたポジティヴ・ケイパビリティ（課題解決能力）とともに、ネガティヴ・ケイパビリティにも注目が集まる可能性を追い求めている。

社会人院生から

最高に「リア充」な日々

教育社会学講座
修士課程1回生
福田 高之

教育は、「教」え「育」てると書く。では、自分の子どもに何を「教え」、どのように「育てる」のか。私が教育という営みに強い関心を抱くようになったきっかけである。誰よりも大切なこの子を育てるために必要なツールは何か。この子がこれから生きていくこの社会とはどのようなものなのか。問いは尽きない。

抽象的な問いは尽きないのに、それを言語化し、研究上のリサーチ・クエスチョンに落とし込むのは難しい。その難しさと日々格闘し、家事育児・仕事との両立を図りながら研究に明け暮れる日々。私の置かれた状況を理解した上で熱心に指導してくださる指導教員がいる。幸い、親子ほど歳の離れたゼミ生もさほど違和感なく接してくれている（と、勝手に思っている）。違う時代に生まれ育った優秀な研究仲間との会話は何よりもおもしろい。私の社会人としての経験に興味深く耳を傾けてくれる反面、容赦なく批判もしてくれる。

このような日々を送るには、何よりも家族の理解が不可欠である。理解を示してくれている家族には感謝以外ない。家族の理解・協力なくしてこの生活はまちがいなく成立しない。京大という空間、家族の存在、自分の好奇心。最高の研究環境に恵まれた中で、やれるところまでやろうと思う。

唯一困ったことと言えば、わが子が「大学は大人になって好きな時に行けば良いし、何回でも行けば良い」と思っているところ。たしかに、いろいろな選択肢があって良いとは思う。また、社会の「普通」を問い直すのが社会学のおもしろいところ。一方で、親としてはあまり「普通」から離れると生きづらさを感じるかもしれないよ、とも思う。そのわが子は、小学校で「福田さんのパパは何してる人？」と問われて「大学院生！」と答えたらしい。

そんなこんなの生活を送り、重要性が唱えられつつもなかなか進まない「リカレント教育」を体現する存在でありたいと思う。

留学生から

日本語漢字の学び—学習者と研究者の立場から

教育認知心理学講座
博士後期課程3回生
康　楠

「大学院でどんな研究をしていますか」と聞かれると、私は「日本語漢字単語の音韻処理、特に中国人学習者を対象に」と答えている。そんなとき「ええ?中国人なら漢字の学びは得意だろう」と反応されることは珍しくはない。しかし、それが本当なのか、一人の中国人学習者の私も、正直、戸惑っている。

確かに、「豆腐」という言葉を例にすると、中国語には、このような日本語漢字単語と音韻・形態・意味的に類似している言葉が多い（中国語の発音は「ドォーフー」、意味は同じ）。豆腐とその作り方が元々入唐僧によって中国から日本に伝わっていることに思い馳せると、言葉も食べ物と同様に、文化の一環として民間に広がっていたことに気づく。このような言葉は中日同根語（cognate）と呼ばれている。とても類似しているのだから、学びやすいことは当然といえば当然のことかもしれない。しかし、「類似しているからこそ習得しやすい」という考えは、半分事実、半分自己催眠ではないかと私は思っている。たとえば、「毛皮」という単語は、中国語にも存在し、それは意味的・形態的に日本語の毛皮と類似している。ただし、その中国語の発音である「マォーピー」から推測すると、日本語の発音はよりよく似た「モウヒ」にするべきであろう（しかしそれは大間違い！）。実際に私の実験では、このような読みの誤答は圧倒的に多く見られ、「ケガワ」という正しい答えをした日本語中級学習者は半分にも達していない。このような中国語単語との類似性による負の転移は、果たして母語の特徴によるものか、それとも言語知識の統計的学習による「合理的な誤り」なのか、それが研究者としての私の関心事である。

ちなみに、中国語では、「毛皮」は「生かじり」という意味合いも含んである。学習者は言葉の類似性という生かじりの知識に満足してしまうと、「モウヒ」のような誤りを犯してしまい、そして研究者は、「当然」らしい思い込みを慎まないと、いい研究を生み出せないだろうと思う。

附属臨床教育実践研究センターから

臨床教育実践研究センターの活動

附属臨床教育実践研究センター長
松下 姫歌

附属臨床教育実践研究センターは今年で開設27年目を迎えます。心理・社会的問題は、現代社会のもつ価値観や理解の枠組みでは捉えきれない、現代社会の盲点を示しています。心理臨床現場はその最前線です。個々の相談者が自身の一回きりの生を社会の中でいかに生きていくかの問題と、一人一人異なる潜在的多様性を社会がいかに視野に入れ扱っていくかの問題が、表裏一体であるからです。このような問題の理解と対応には、個々の相談に真摯に向き合う中で、新たな理解の視点を発掘し、常に既存の理論や知見を問い直し刷新していくことが不可欠です。当センターはこのような高度に専門的実践・研究を推進します。

今秋には当センターの母体である心理教育相談室が開設70年目を迎えます。当相談室は本学教育学部開校まもない開設当初から一般市民に開かれ、20年目に機関誌「心理教育相談室紀要」を発行しています。今秋50号を数える本誌創刊号では、河合隼雄先生が臨床心理学研究の方法論を打ち出すとともに、事例研究論文とそれに対する一流専門家による誌上スーパーヴィジョンという研究・訓練法の新機軸を示しており、この方法は今や学派を超えたスタンダードとして広く取り入れられています。この方法論は、まさしく心理・社会的の個別性と多様性の理解に向けた新視点発掘およびパラダイム刷新を目指すものです。

当センターはこれからも相談室黎明期からの精神を受け継ぎ、心理教育相談室の活動を基盤としつつ、新たな視座と視点をセンター主催の各種講座や機関誌「附属臨床教育実践研究センター紀要」等、さまざまな形で広く社会に向けて発信します。今年度は、リカレント教育講座を「『心の教育』を考える一現代の子どもをめぐる“暴力”一」と題し、一流の専門家の先生や当センター客員教授をお招きして7月30日に開講、公開講座を国際箱庭療法学会前会長のアレクサンダー・エスターホイゼン先生を外国人客員教授として招聘して11月5日に開講し、心理・社会的問題へのアプローチの深化と発展に向けて取り組んで参ります。

教育実践コラボレーション・センターから

『世界と日本の事例で考える 学校教育×ICT』の刊行

教育実践コラボレーション・センター長
西岡 加名恵

2023年4月に教育実践コラボレーション・センター長に就任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。当センターは、教育学研究科内外の異分野連携・隔合を促進し、様々な教育課題に対する組織的な対応をコーディネートすることを目的として活動しています。

この度、当センター監修で、『世界と日本の事例で考える学校教育×ICT』（明治図書）を刊行いたしました。これは、2020年9月から2021年12月にかけて学内経費GAPファンドによるプロジェクト「ポスト・コロナの初等中等教育におけるICT活用に関する研修プログラム開発と具体的提言」に取り組んだ成果を下敷きにしつつ、さらに京都大学大学院教育学研究科を修了した研究者や在学中の大学院生の協力も得てまとめたものです。

第1章では、「日本におけるICT活用の現在」について、学校教育における活用、授業づくり、デジタル・ドリル、臨床心理学的知見、「教育の情報化」政策、データ利活用という6つの視点から検討しています。また、第2章では、アメリカ合衆国、イギリス、フランス、韓国、中国、オーストラリア、カナダの各国におけるICT活用の状況について紹介しています。本書において、ICT活用をめぐる多様な視点や論争点を提示することで、ICT活用によって今後の学校教育に広がる可能性と注意すべき留意点を考える際の一助となればと願っています。

なお、本年度も当センターでは、教員などの研究成果を交流する「知的コラボの会」、学校等との連携による共同研究、大学院生がフィールドで探究する科目「研究開発コロキアム」などの活動に取り組んでいきます。また、8月18日（金）・19日（土）には、E.FORUM「全国スクールリーダー育成研修」を対面開催予定です。2023年度も、最新の研究成果や政策動向を踏まえた多彩なプログラムを用意しています。ご注目いただければ幸いです。

グローバル教育展開オフィスから

国際的な研究発信を相対化の契機として

グローバル教育展開オフィス　教授
高山 敬太

グローバル教育展開オフィスでは、院生の国際的な研究発信を積極的に支援しています。具体的には、国際学会発表支援や研究論文の翻訳・校正支援を行っており、前者は海外での学会発表に必要な渡航費の支援、後者は研究論文の外国語での出版に関わる費用を支援しています。2022年度は、学会発表支援に8名、論文の翻訳・校閲支援に5名の学生が採択されました。しかしながら、こうした財政面での支援は当オフィスが行う支援のごく一面でしかありません。このほかにも、投稿先の学術誌の選択、学術誌編集者とのやり取り、査読者からのコメントへの対応、更には、学会発表申請時におけるフォームの書き方の指導に至るまで、支援は多岐にわたります。

とりわけ難しさを感じるのが、国際的な学術研究の前提と日本のそれが微妙にずれていることから生じる問題です。国際的な学会発表や学術誌においては、自己主張を中心にしたロジックの提示が求められます。まず論文に自らの主張が存在すること、そしてその主張が論文の中核を形成していることが大前提となります。また、その主張には一定程度のオリジナリティが求められ、その独自性は先行研究との明確な差異化により前景化される必要があります。そして、研究の核心部では、主張を実証・論証する根拠の提示が明示的な形で求められます。こうしたロジックスタイルに沿って、学会発表の申請フォームが用意されており、また、投稿原稿のアブストラクトを用意することが暗黙の前提となっており、これに不慣れな学生は戸惑ってしまいます。ここには、主張の実証・論証性と切り口の独自性で研究を評価する英語圏の学術動向を垣間見ることが出来ます。

私の指導としては、こうした国際的な研究の在り方が必ずしも唯一正しいものではないことを強調します。ひとまずは、国際的とされるロジックスタイルに慣れてもらうことで、「ゲーム」に参加するための「ルール」を学んでもらいます。その一方で、国際的な「ルール」と自らが慣れ親しんできたそれの両者を相対化するように促します。こうして、日本で暗示的に学んできたものをより意識化・言語化することが可能となり、ゆくゆくは、場面と相手と目的に応じて、様々な「ルール」を使いこなせる、または既存の「ルール」の拘束性から相対的な自立性を獲得した研究者になることができると考えます。

最後になりましたが、昨年度をもちまして、これまで一緒にオフィスを切り盛りしてきた安藤幸先生と高松礼奈先生がご退職されました。そして、私も本年度8月にアデレードにある南オーストラリア大学に異動することになりました。2019年の4月に室長として赴任して以来、多くの学生さんたちと学び、多くの先生方、並びに事務職の方々からご指導頂いたことを深く感謝いたします。2023年度からは、南部広孝先生が室長を担当されています。今後とも、当オフィスへの温かいご支援とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

事務室から

思いがけない展開

事務長補佐兼教務掛長
國見 和敬

私は小1から剣道を習っておりましたが、昭和当時の指導は
怖いわ、稽古はキツイわ、痛いわで、本当に嫌で仕方ありませんでした。小1の頃は稽古前になると、やめたい、行きたくないと母親に度々泣きつくのですが、その度に「男のくせに！」と叱られ家から叩き出され、泣きながら稽古に行っているような状態でした(昭和ってどこの家もこんな感じでした。多分)。中学でも、諸事情で剣道部に入ることになりましたが、よくさぼっては友達の家でファミコンをしたりCDラジカセを聴いたり。中3で副部長に指名され、さぼれなくなってしまいましたが、引退試合後は、もう一生剣道なんかせんわ!とせいせいしていました。

それから約30年後、妻から当時小1の息子に剣道を習わせたいと提案され、私は高校でしていたラグビーを習わせたかったのですが押し切られました。剣道には一切関わるつもりがありませんでしたが、試合になかなか勝てずにしょんぼりしている息子を見ているのがだんだんといたたまれなくなり、約2年間、現役時代は1冊も読んだことがない剣道の本を何十冊も読み、息子の試合動画やYouTubeの動画を何百本も見て研究し、休日は息子と秘密の特訓をしました。幸い、今年2月の市の大会で優勝できました。喜ぶ息子を見て、やっと中断していた趣味の再開や積みゲーの消化ができるな、と思っていたのですが、大会後、今度は道場の指導者側に回るように言われ・・この春から初心者の指導を担当しています。私なんかが大切な基本を教えていいのかと戸惑いつつ、目をキラキラさせて楽しそうな子供達を見ていると、こんな稽古をしたら上達するかな、鬼滅の刃を例に使ったら喜んでくれるかな、等いろいろ指導のアイディアが湧いてきたりで、この思いがけない展開を意外と楽しみつつ取り組んでいます。道場で子供達にもらった元気を教育学研究科での仕事に活かし、全力で取り組む所存です。これからどうぞよろしくお願いいたします。

ソウル大学校との研究交流会についての報告

グローバル教育展開オフィス　教授
高山 敬太

2023年2月16日に、ソウル大学校師範大学教育学科の先生方との研究交流会を開催いたしました。今回は、グローバル教育展開オフィスを中心に交流会を企画し、5名の大学院生がアシスタントとして当日の運営を手伝ってくれました。

ソウル大学校と当研究科は2011年に交流協定を結んでおり、その後2度の延長を経て今日に至っています。延べ12年間にわたって協定が継続してきたことになり、これは当研究科の国際交流協定の中でも最も古いものの一つです。

昨年の協定更新時には、これまで以上に頻度を増やして交流を活性化させることで合意がなされました。昨年は、京大側から3名の教員が先方の主催する国際学会（ICER）に参加し、私も基調講演者の一人として登壇させていただきました。今年の研究交流会では、ソウル大側から14名の先生と4名のアシスタント（大学院生または助教）の方々が来校され、京大側は14名の教員と6名の大学院生が参加しました。

当日は、午後2時より吉田キャンパスの国際科学イノベーション棟の大会議室において開会式を行ったのち、教育測定、教育心理、教育工学を第一分科会、教育カウンセリングと特殊教育を第二分科会、教育行政と教育哲学を第三分科会として、小グループでの研究交流を行いました。分科会の後、大会議室にてそれぞれの分科会における議論の報告と総括を行いました。最後に、ソウル大学校のHyun-Jeong Park学科長が謝辞を述べられ、双方への贈り物の贈呈式が行われた後、午後5時半過ぎに全体会を終了いたしました。3時間半という短い期間でしたが、内容の濃い情報・意見交換を行うことが出来ました。

当日の司会進行を務めた私からは、次のことを全体へのメッセージとして最後に申し上げました。すなわち、この協定が東アジアにおいてもっとも研究力のある二大学間のものであることの意義を、東アジアの地域性をベースにした知の構築が叫ばれている今日、深く考える必要があるという点です。ソウル大学校と当研究科の協定を、より大きな東アジアからの研究の発信という昨今の学術的な動向に位置付けるならば、これからどのようにこの提携関係を展開させていくべきなのでしょうか。10年後、20年後、さらにはその先を見据えた、より大きなビジョンをもって両校の協定関係を構築していく必要があると考えます。今回の研究交流会では、こうした大きなビジョンについて話し合う時間を割くことは出来ませんでしたが、これからの課題として意識することを確認し合って、交流会を終えました。

第一分科会の様子

贈り物の贈呈

若手研究者出版助成事業

教育学研究科では、京都大学人と社会の未来研究院若手出版助成を受け、優秀な若手研究者による博士論文の出版助成事業を行っております。本制度を利用して昨年度は5件採択されましたので、ご紹介します。

学ぶことを選んだ少年たち 非行からの離脱へたどる道のり

【晃洋書房】

大江將貴　京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了（2022.3.23）／京都大学大学院教育学研究科研究員

犯罪・非行からの離脱に対する注目が高まっていますが、元犯罪者や元非行少年がどのように犯罪・非行から離れていくのかという犯罪・非行からの離脱過程については十分に検討がなされてきたわけではありません。

本書では、少年院などの矯正施設を退所した後に、学校や教育施設へと移行した元非行少年に対して継続的なインタビュー調査を行いました。非行からの離脱プロセスを歩んでいる少年たちの語りをもとに、学ぶという経験が彼らにとってどのような意味を持っているのか検討を行い、その経験が非行からの離脱にどのような影響を与えるのかについて考察しました。

本書が、少年非行や犯罪・非行からの離脱に関心を持つ方々にとって少しでも参考になれば幸いです。

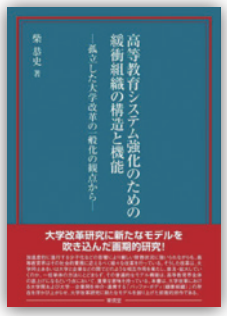
アメリカにおける科学教育カリキュラム論の変遷 科学的探究から科学的実践への展開

【日本標準】

大貫　守　京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了（2020.1.23）／愛知県立大学教育福祉学部・准教授

アメリカでは、長きにわたり、科学教育において探究として科学を教えるという方針が貫かれてきました。しかし、2011年に全米研究評議会が発表した『K-12学年の科学教育のための枠組み』では、この方針が継承されつつも、それを発展的に解消する形で新たに実践として科学を教えるという方針が示されました。そして、それを基盤とした共通教育目標（『次世代科学教育スタンダード』）も開発されました。

本書は、この実践として科学を教えるという考え方について、旧来の科学的探究の枠組みに言及しつつ、その背景にある科学観やカリキュラム論、指導論、学習論を理論的・実践的に検討することで、その枠組みの一端を明らかにすることを試みました。本書が科学的に探究する力を育むための指導方法とカリキュラムに関心を持つ方にとって少しでも参考になれば幸いです。



高等教育システム強化のための緩衝組織の構造と機能 ―孤立した大学改革の一般化の観点から―

【東信堂】

柴 恭史　京都大学大学院教育学研究科修士課程修了（2013.3.25）、博士後期課程中途退学（2015.3.31）、論文博士（2020.9.23）／桃山学院教育大学人間教育学部 准教授

大学に関わるものにとって、「大学改革」は良くも悪くも無縁ではいられないトピックです。どのような大学改革をどのように行うべきか、という点に関しては、多数の研究蓄積があります。しかし、現実の改革においては（文部科学省による改革促進政策も含めて）意欲的な取り組みでも社会の認知を得ることができないために定着もせず、普及もしないという課題が生じています。

本書が注目するのは、ある大学で生み出された改革が、他の大学（および一般社会）にも受け入れられ普及していくための仕組みです。アメリカの高等教育関係団体の事例と経営学における普及理論をヒントに、「バッファ・ボディ（緩衝組織）」という新たな組織モデルを提案し、その有効性を論証しています。本書が大学と社会のよりよい関係の一助になることを願っています。

『ゼクシィ』のメディア史 花嫁たちのプラットフォーム

【創元社】

彭永成　京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了（2022.3.23）／桃山学院大学社会学部　講師

圧倒的な情報量と存在感から抜群の知名度と影響力を誇る結婚情報誌『ゼクシィ』。

デジタル社会、雑誌不況といわれる現在においても紙の雑誌が売れ続け、「ゼクシィ＝結婚」という記号を成立させるほどの社会的認知度を獲得し、コロナ禍による不況を経た後もブライダル業界から絶対的信頼を寄せられている。『ゼクシィ』は、いかにして「結婚式のバイブル」となったのか。そして、誌上で描かれる「花嫁」のイメージはどのように変化してきたのか。

本書は業界では常に「ひとり勝ち」といわれる『ゼクシィ』の絶対的地位を支える「ゼクシィ神話」成立の秘密と、恋愛情報雑誌としてスタートした『ゼクシィ』がブライダル情報に特化し、幾多の可能性のなかから花嫁たちをそれぞれの結婚式へと送り出す「プラットフォーム型雑誌」になるまでのメディア史を、同類他誌や地方版、海外版、ウェブサイトなどと比較しながら多角的に分析する。

イギリスの自由教育論争 教養をめぐる科学と文学の相克

【東信堂】

本宮 裕示郎　京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了（2022.3.23）／滋賀県立大学人間文化学部人間関係学科准教授

昨今、教養ブームとも言い得るほどに、書店には「教養としての○○」や「教養のための○○」などを冠する書籍や雑誌が並んでいます。こうした動きは、近年初めて見られたものではありません。古くは戦前の大正教養主義に始まり、エリート主義的や権威主義的といった批判を受けながらも、その価値が繰り返し説かれてきました。

本書は、19世紀イギリスでの論争を参考に、幅広く知識を得ることと人格形成の関係を問うことで、教養の価値を再考するものです。当時価値が認められつつあった科学教育を推進する立場と、伝統的に重視されてきた文学教育を擁護する立場の間で自由教育論争が展開されました。本書では、T. H. ハクスリーとM. アーノルドの思想を手がかりに、幅広い知識を得ることと人格形成の関係を科学と文学という切り口から模索しています。本書が「教養とは何か」を考える一助となれば幸いです。

諸記録

教員寄贈図書　2022（令和4）年度

寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
岡邊健	犯罪の科学	ニュートンプレス	2022
岡邊健	更生保護学事典	成文堂	2021
佐野真由子	万博学 = Expo-logy	思文閣出版	2022
田中智子	明治前期中学校形成史　府県別編5, 南畿南海	成文堂	2022
服部憲児	フランスの教員養成制度と近年の改革動向： 今後の日本の教員養成を考えるために	ジアース教育新社	2022
松下佳代	対話型論証ですすめる探究ワーク	勁草書房	2022

受入期間：2022/4/1 ～ 2023/3/31　寄贈者氏名順（敬称略）
教育学研究科・教育学部図書室にいただいた寄贈者の著作・分担執筆・翻訳・監修・監訳のみ掲載です。
今後とも蔵書充実のためにご寄贈くださいますようよろしくお願いいたします。

主な出来事（2022.11.1~2023.3.31）

2022年11月4日（金）

高大連携：滋賀県立膳所高等学校
高校生向け特別授業「図書館の歴史と多様性」
福井佑介准教授
吉田キャンパス総合研究2号館

11月20日（日）

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター主催 第20回公開講座
「社会的精神分析に向けて」
客員教授　ロジャー・フリー
キャンパスプラザ京都 第1講義室

12月13日(火)

小中高大連携活動
中学生を対象にした命の授業「命の授業～ものの見方を変えてみる～」
グローバル教育展開オフィス　安藤幸講師
奈良県橿原市立白橿中学校

12月15日（木）

グローバル教育展開オフィス
ウェビナーシリーズ 2022　第5回講演会
「移民の若者から見る日本の教育―参加型アクションリサーチの試み」
講師　筑波大学人間系教育学域　徳永智子准教授
オンライン

12月24日

令和4年度 高大連携フォーラムin京都大学
「R4年度 12/24高大連携フォーラムin京都大学」
高校生によるポスター発表と高校生・大学生の交流会
人間・環境学研究科棟 大講義室

12月26日（月）

教育実践・コラボレーションセンター E.FORUM
連続研究会「『生きる』教育」
講師　大阪市立田島南小学校　小野太恵子教諭
オンライン

2023年1月11日から31日

小中高大連携活動
奈良県立宇陀高等学校専攻科介護福祉科生徒によるフォトボイス展
宇陀市役所地域振興課　市役所1階ふるさとテラス
グローバル教育展開オフィス　安藤幸講師

2月11日（土）

教育実践・コラボレーションセンター E.FORUM
連続研究会「『生きる』教育」
講師　社会福祉士　辻由起子
オンライン

2月16日（木）

ソウル大学・京都大学教育研究交流会
ソウル大学校師範大学教育学科・京都大学教育学研究科交流会
国際科学イノベーション棟

2月17日（金）

グローバル教育展開オフィス
ウェビナーシリーズ 2022　第6回講演会
「障害者のインクルージョンに対する日本人の拒否的反応–量的データによる社会心理学的アプローチ」
講師　久留米大学文学部心理学科　佐藤剛介准教授
オンライン

3月9日（木）

杉本均教授最終講義
第 49 回「知的コラボ」の会「比較教育学の 3 つの物語」
総合研究 2 号館 第一講義室

3月21日（火）

教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
「第18回実践交流会」
講演「対話型論証による学びのデザイン――教科と総合での探究をどうすすめるか」
松下佳代教授
吉田南総合館（北棟）共北38講義室

入試結果　2023（令和5）年度

教育学部

日程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	文系	49	147	143	49	58
	理系	10	42	34	10	
特色入試		6	23	23	1	1
学士入学（第3年次編入学）		10	20	20	7	7

※前期日程の募集人員は、特色入試において最終的な入学手続者数が募集人員に満たない場合には、残余の募集人員を加えます。

教育学研究科

課程等			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
教育学環専攻	修士課程	研究者養成プログラム	37	66（15）	65（15）	42（8）	42（8）
		教育実践指導者養成プログラム	5	5	5	4	4
	博士後期課程	研究者養成プログラム	若干名	12（2）	11（2）	5（0）	5（0）
		臨床実践指導者養成プログラム	4	5	5	3	3

※博士後期課程（研究者養成プログラム）は内部進学者を除いた数。

（　）内の数は外国人留学生で内数

学位授与件数　2022（令和4）年度

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	70
修士	教育学環専攻	26
博士	課程博士	16
	論文博士	0

教育職員免許状取得状況　2022（令和4）年度

中学校教諭専修免許状	0
中学校教諭1種免許状	0
高等学校教諭専修免許状	0
高等学校教諭1種免許状	4
特別支援学校教諭1種免許状	1

外部資金受入れ（2022.10.1～2023.3.31）

寄附金

研究題目	寄附者	研究担当者
Research support fund for "The Education of the Whole Person: An East-West Dialogical Critique"	Philosophy of Education Society of Great Britain Dr. Naomi Hodgson	齋藤　直子
受験産業のデジタルトランスフォーメーションと学習文化の変容：EdTech 時代の受験勉強	公益財団法人　日立財団	藤村　達也

共同研究

研究題目	委託者	研究担当者
ガーディアンロボット開発のための心理学的研究	国立研究開発法人 理化学研究所	楠見　孝 齊藤　智 野村　理朗 高橋　雄介

受託研究

研究題目	委託者	研究担当者
児童／生徒および教師を対象とした生理・心理機能および食生活習慣との関連性の検証	国立研究開発法人 科学技術振興機構	明和　政子

科学研究費補助金　2023（令和5）年度

事業名	研究課題名	氏名
基盤研究（S）	個別的育児支援手法の創出を導く養育者―乳児の動態とその多様性創発原理の解明	明和　政子
基盤研究（B）	日本植民地統治下台湾における教育の「植民地性」再考―共時的・通時的比較分析	駒込　武
基盤研究（B）	実行機能を「実行」する知識の獲得過程と運用機構の解明	齊藤　智
基盤研究（B）	共感覚比喩と共感覚現象に共通する認知メカニズム：大規模ｗｅｂ実験による検討	楠見　孝
基盤研究（B）	領域横断的な万国博覧会史研究を通じた新しい戦後史叙述の可能性	佐野　真由子
基盤研究（B）	自己超越的感情の生起メカニズムに関する心理・生物・情報学的研究	野村　理朗
基盤研究（B）	コンピテンシーの形成・評価の検討―統合性・分野固有性・エージェンシーに着目して―	松下　佳代
基盤研究（B）	大学教授職の役割分化の実態と論点の整理：日豪の教育担当教員を事例に	佐藤　万知
基盤研究（B）	子どもの多様なニーズに対応するパフォーマンス評価を活かしたカリキュラム改善	西岡　加名恵
基盤研究（B）	An Alternative Mode of Student Well-Being or Unhappy Schools? Exploring Interdependence in Education across East and Southeast Asia, Building Evidence to Impact the Post-SDG 2030 Global Policy Agenda	RAPPLEYE, Jeremy
基盤研究（B）	大学教授職の役割分化の実態と論点の整理：日豪の教育担当教員を事例に	佐藤　万知
基盤研究（B）	ＳＮＳカウンセリング相談員養成プログラムの開発	畑中　千紘
基盤研究（B）	若年者の犯罪・非行からの離脱プロセス：デジスタンスを促す／妨げる社会的要因の探求	岡邊　健
基盤研究（C）	ソーシャルワーク専門職教育における「多様性教育」の国際比較研究	安藤　幸
基盤研究（C）	明治期におけるカナダ・メソジスト教会の教育事業－公教育と学校制度の展開への対応―	田中　智子
基盤研究（C）	ブータン社会における次世代支援とモラル育成―サステナビリティとスピリチュアリティ	西平　直
基盤研究（C）	他者の「受諾」に向けた哲学実践：アメリカ超越主義の教育的意義をめぐる国際対話研究	齋藤　直子
基盤研究（C）	近世医療情報の教育メディア史―「不安」に挑む「施印」	VAN STEENPAAL, Niels
基盤研究（C）	「対面型遠隔教育」としてのトランスナショナル高等教育の機能に関する国際比較研究	杉本　均
基盤研究（C）	自閉スペクトラム特性の強みを探る	明地　洋典
基盤研究（C）	都市新中間層家庭の人間形成と教育戦略：　大正・昭和初期の児童文学の分析を中心に	竹内　里欧
基盤研究（C）	日本型学校教育の構造変容に対応する資質・能力ベースのカリキュラムと授業の再構築	石井　英真
基盤研究（C）	教員の思考様式等を考慮した教育政策の立案・実施に関する研究	服部　憲児
基盤研究（C）	ＳＴＥＡＭ教育を軸としたカリキュラム・マネジメントの推進にむけた教員の力量開発	開沼　太郎
基盤研究（C）	社会情動的コンピテンシーの測定と涵養：特性とスキルの弁別のための教育心理学的研究	髙橋　雄介
基盤研究（C）	公立図書館集会室の理念と現実の確執に関する歴史と現状の分析	川崎　良孝
基盤研究（C）	コンセプトマップによる学習成果可視化のための評価指標の開発とウエブシステムの構築	田口　真奈
基盤研究（C）	人を全体的にとらえるとは：アメリカ哲学の文脈的全体性をめぐる国際的教育研究	齋藤　直子
基盤研究（C）	教育的関係における信頼の理論と実践に関する研究	広瀬　悠三
基盤研究（C）	本邦におけるスーパーヴィジョンの成り立ち－精神分析史からのアプローチ	西　見奈子
挑戦的研究（開拓）	カリキュラム空間：生徒の自己調整思考能力を高める革新的なカリキュラム編成	MANALO, Emmanuel
挑戦的研究（萌芽）	ビルドゥングスロマンと「女性の生き方」の表象に関する比較文化社会学研究	稲垣　恭子
挑戦的研究（萌芽）	ワーキングメモリ・トレーニングの「負の効果」を越えて	齊藤　智
挑戦的研究（萌芽）	ＳＮＳを活用した心理支援システムの開発と理論的構築	畑中　千紘
若手研究	自閉症の選好性過剰説の認知科学的検討	明地　洋典
若手研究	人間の養育欲求と認知：社会神経学アプローチからの解明	高松　礼奈
若手研究	童話『ピノキオ』をめぐる差別図書問題と図書館の対応に関する総合的研究	福井　佑介
若手研究	意味的類似性効果に基づく意味的保持メカニズムの解明	石黒　翔
若手研究	オランダのオルタナティブスクールにおける教師の指導性	奥村　好美
若手研究	里親支援についての日伊比較研究：＜脱施設化＞の社会的背景の解明に向けて	藤間　公太
国際共同研究強化（B）	他なるものとの共存に向けた政治教育：日本先導によるアメリカ実践哲学の国際対話研究	齋藤　直子
国際共同研究強化（B）	認知リソース概念の誤謬に挑む国際共同研究	齊藤　智
国際共同研究強化（B）	いかにして国際社会で使える英語を身につけるか：スピーキング力と意欲の向上を端緒に	MANALO, Emmanuel

人事異動（2022.11.1～2023.4.30）

【2022（令和４）年11月1日】

	技術補佐員（人間・教育科学）	採用

【2022（令和４）年12月16日】

	事務補佐員（教育社会学）	採用

【2022（令和４）年12月31日】

	事務補佐員（教育社会学）	任期満了

【2023（令和５）年1月6日】

	派遣職員（教務掛）	採用

【2023（令和５）年3月16日】

	派遣職員（人間・教育科学）	採用

【2023（令和５）年3月31日】

杉本　均	教授（教育社会学）	定年退職
安藤　幸	講師（グローバル教育展開オフィス）	退職
高松　礼奈	助教（グローバル教育展開オフィス）	退職
豊原　響子	特定助教（附属臨床教育実践研究センター）	任期満了
勝間　理沙	特定助教（教育学研究科）	任期満了
黒田　真由美	研究員（教育・人間科学）	任期満了
	事務補佐員（教育・人間科学）	任期満了
	事務補佐員（教育認知心理学）	任期満了
	事務補佐員（教育認知心理学）	任期満了
	事務補佐員（高等教育学コース）	任期満了
	事務補佐員（グローバル教育展開オフィス）	任期満了
	事務補佐員（地域連携教育研究推進ユニット）	任期満了
	事務補佐員（教務掛）	任期満了

【2023（令和５）年4月1日】

齊藤　智	教授　研究科長・学部長（任期2023.4.1-2025.3.31）	
南部　広孝	教授　副研究科長（任期2023.4.1-2025.3.31）	
西岡　加名恵	教授　副研究科長（任期2023.4.1-2025.3.31）	
松下　姫歌	教授　附属臨床教育実践研究センター長（任期2023.4.1-2025.3.31）	
服部　憲児	教授　地域連携教育研究推進ユニット長（任期2023.4.1-2025.3.31）	
齋藤　直子	教授　現代教育基礎学系長（任期2023.4.1-2024.3.31）	
松下　姫歌	教授　教育心理学系長（任期2023.4.1-2024.4.1）	
岡邊　健	教授　相関システム論系長（任期2023.4.1-2024.3.31）	
服部　憲児	教授（教育社会学）	昇任
藤間　公太	准教授（教育社会学）	採用
畑中　千紘	准教授（臨床心理学）	採用
田中　友香理	特定講師（人間・教育科学）	採用
水野　鮎子	特定助教（附属臨床教育実践研究センター）	採用
廣中　理絵	事務長　宇治地区総務課長・化学研究所事務長へ配置換	
平野　彰人	事務長	
	本部構内（理系）共通事務部企画戦略課長・地球環境学堂事務長より配置換	
國見　和敬	事務長補佐（兼教務掛長）	
	教育推進・学生支援部厚生課課長補佐（課外活動主査）より配置換	
和田　美加	掛長（教職教務掛）　医学研究科教務課掛長（学部教務掛）へ配置換	
辻　幸代	掛長（教職教務掛）　経済学研究科掛長（大学院掛）より配置換	
石田　智敬	研究員（教育・人間科学）	採用
勝間　理沙	研究員（高等教育学コース）	採用
杉本　均	研究員（地域連携教育研究推進ユニット）	採用
	教務補佐員（教育社会学）	採用
	事務補佐員（グローバル教育展開オフィス）	採用
	事務補佐員（地域連携教育研究推進ユニット）	採用

諸報

新任教員・事務職員紹介

藤間　公太　准教授
所属：教育社会学講座
専門：家族社会学、福祉社会学

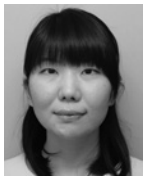
出身は福岡県で、趣味は音楽です。おいしいものを食べることも大好きです。

畑中　千紘　准教授
所属：臨床実践指導者養成コース
専門：臨床心理学、心理臨床実践学

時代に応じて移り変わるこころの性質や症状・問題について、臨床実践に基づいて探求していきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

田中　友香理　特定講師
所属：教育・人間科学講座
専門：発達科学，発達心理学

皆さまと一緒に発達科学の研究に関わることができることを楽しみにしています。よろしくお願いいたします。



水野　鮎子　特定助教
所属：臨床教育実践研究センター
専門：臨床心理学、心理療法

心理臨床の場で出会うイメージやその表現について研究しています。長年お世話になった本研究科に貢献できるよう努めます。よろしくお願い致します。

平野　彰人　事務長

４月から事務長として着任いたしました。趣味はカヤック、野球観戦、マラソンの三刀流です。早く慣れてお役に立てるよう頑張りますので、何卒よろしくお願いいたします。

國見　和敬　事務長補佐兼教務掛長

4月から事務長補佐兼教務掛長としてお世話になっております。教育学研究科は初めての部署で、日々新鮮な気持ちで業務に取り組んでいます。精一杯頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

辻　幸代　教職教務掛長

4月から教職教務掛でお世話になっております。不慣れなことばかりでご迷惑をおかけするかと思いますがよろしくお願いいたします。

名誉教授 訃報

齋藤久美子　京都大学名誉教授

齋藤久美子先生が令和4年11月2日逝去されました。昭和33年京都大学教育学部卒、昭和42年京都大学教育学博士。同年より四天王寺女子大学文学部助教授、京都府立大学文学部助教授、ウィリアム・アランソン・ホワイト精神分析研究所特別研究員を歴任され、昭和59年京都大学教育学部助教授、昭和63年同教授に就任されました。先生からは、人の心に常に新たに出会っていく姿勢、そこから都度得られる新たな視点、それらによって既存の知見が常に刷新されていく様を学ぶとともに、心のもつ鮮やかで繊細な力そのものをも学ばせて頂きました。平成11年に退官、京都大学名誉教授となられ、甲子園大学人間文化学部教授を務められました。日本心理学会、日本心理臨床学会、日本精神分析学会、日本ロールシャッハ学会等での活動、後進の指導、学問の発展に大きく貢献されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

教育学研究科・教育学部基金

ご寄附いただきました方々への感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。
（公開をご希望されない方については、掲載しておりません。）

京都大学教育学部昭和４２年入学同総会　　古谷　猛
辻村　政雄　　鳳凰　敦

※50音順　※2023年4月末現在

ー現場に活かせる「理論と実践の往還型の教育・研究」を推進し、未来の教育の創造と、それを担う人材を育成します。ー

教育学研究科・教育学部は、1949（昭和24）年の創設以来、教育学研究の推進と研究者の養成に加え、全学の教職教育を担いながら、数多くの卓越した人材の輩出と、研究成果の現場への還元によって社会の要請に応えてきました。

学校はもとより、地域、家庭、職場などあらゆる場面が「人間形成」の場であり、探究の対象です。本研究科・学部では、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域への地域振興提言などを行うほか、全国の教育現場の第一線で働く人々に研修の機会を提供してきました。こうした社会と連携した教育研究活動は、学生にとって、現場のリアルな問題に触れて自らの関心を見つけ、課題解決への手法を考察する実践の場ともなっています。今後も社会と連携した実践教育を行うため、安定した財政基盤として設立したのが教育学研究科・教育学部基金です。

2021（令和3）年度には、教育学研究科・教育学部基金のご支援によって、ホームページを大幅に刷新させていただきました。このリニューアルは、教育学環専攻1専攻への改組とその意図を明確に反映し、「理論と実践の往還型」の教育・研究をより一層力強く推進するため、研究科・学部の活動の発信媒体としてのホームページの再構築を目的として行われました。2022（令和４）年度には、基金からの支出は行わない方法でコンテンツを充実させ、ホームページを洗練してまいりました。今後、引き続き、研究支援と教育支援を充実させるため、本基金を発展的に活用させていただきます。ご支援賜りますようお願い申し上げます。

基金の使途：

項　目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣　など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催　など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動　など

詳細については以下をご覧ください。
http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html

編集後記

本号「名誉教授から」のコラムで、杉本均名誉教授が教育学研究科の「小宇宙」について述べておられます。教育学研究科は、様々な学際的知が集う場であり、垣根を超えることには苦痛が伴うけれども、「居心地の悪さに身を委ねる勇気」をもってほしいというお言葉です。本ニュースレターに掲載された様々な声は、小宇宙の豊かさを物語っています。この貴重な知の宝庫を活かすためにも、相互啓発の場や、垣根を低くする制度改革を進め、互いのポジティブな可能性を互いに引き出す組織へと教育学研究科が進化していくことを願います。（齋藤直子）

表紙によせて

ソウル大学校の先生方は、交流会の当日朝に関空に到着されました。フライトは定刻でしたが、入国審査に想定以上の時間がかかってしまい、1時間遅れて京大に到着。残された3時間半をできるだけ有意義に使うべく、フォーマルな挨拶等は極力減らすことに。不幸中の幸いでしょうか、双方の教員が打ち解けられるアットホームな交流会になった気がします。交流協定が締結されて以来、ソウル大学校から大勢の先生方が来訪されるのは今回で2度目。次回は京大側からソウル大学校に赴くことで、この交流関係を双方向のものにしていければと願います。（高山敬太）

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

委員長　齋藤　直子　教授（人間・教育科学講座）
委員　髙橋　靖恵　教授（臨床心理学講座）
委員　藤間　公太　准教授（教育社会学講座）

事務担当
教育学研究科・教育学部総務掛　　ホームページ　http://www.educ.kyoto-u.ac.jp

ガイドドッグペーパー
当印刷物の用紙費用の一部は
関西盲導犬協会に寄付されています